タイトル：2021 年度 教育セミナー（第 17 回）
日時：2021 年 9 月 16 日（木）～19 日（日）
オンライン開催

「モロッコ・ナショナリズム運動のアラブ地域における歴史的意義」
渡邊 文佳（早稲田大学大学院文学研究科）

まずは、今回のセミナーを企画・運営して下さった東京外国語大学の先生方とスタッフの方々に感謝申し上げます。4 日間毎日楽しく勉強になりました。誠にありがとうございました。

★

本セミナーがいかに有意義であるかに関しては、多くの過去参加者の感想文において繰り返し述べられており、主に次のような点が挙げられている。受講生発表をする場合、時には意外な視点から様々な意見をもらえて、研究展望が開ける。講師の先生方の講義および受講生発表から多岐にわたる分野の知見を学べる。興味関心を同じくする他の大学院生と交流できる、等々。実際セミナーに参加したところ、これが本当であることが分かり、確かにこうした点において本セミナーは有意義なものであると感じた。だが、今回のセミナーの中で何が自分にとって特に重要だったかを改めて考えてみると、それは、「研究発表は自分の課題を克服するための練習ではない」ということを痛感したことであると思う。

私は今回のセミナーで研究発表をするにあたり、これまでの論文や口頭報告において上手くできなかった課題を克服しようと決めていた。具体的には、「自分の言葉でゆっくり話す」ことと「研究史全体を自分の研究意義に即して整理する」ことであり、それらは私の中では結構切実な問題だった。そうして発表した結果、発表中はリラックスしてます風に自分の言葉で話せた。研究史のまとめも一応できた。課題は達成できたかもしれない…

と思いきや、しかしそれは自己満足にすぎなかった。

発表後の質疑応答で頂いたいくつかのご質問から察するに、聞いてくれた方々は、やはりモロッコにまつわる専門的知識や史料に基づいたオリジナルな見解の提供を私の発表に期待していたのであり、そうした情報を十分に提示できなかった点において、発表が成功したとは言いがたい。自分の言葉でゆっくり話した結果、話が間怠こしくなり、研究史整理を丁寧にしすぎて、肝心の本論・史料分析を説明する時間が減ったことが一因である。結局、私が自分の中でどんな課題を抱えていようが、何を克服しようが、そんなことは聞いてくれる人にとってはどうでもよかったのだ。

限られた発表時間の中では、それが誰の言葉であろうと共有可能な言葉で（「自分の言葉」って何だ？）、理路整然と話すべきだし、序論部分は簡潔にまとめる方が良い。求められているのは、研究成果の中核を具体的かつ的確に伝え、共有することである。つまり研究発表とは、情報を他の人に伝達し、皆の議論を喚起するための「本番」なのであって、自分の課題を克服するための場ではない。苦手克服の練習なら他でやってから来い！ということだ。本セミナーには本気

で全力で真剣勝負の「本番」の雰囲気が溢れていたがゆえに、私はそれに気付くことができた。

★

　これから参加し発表される皆さんの中には、色々な課題や悩みが自分の中に渦巻いて大変な方もいると思いますが、発表を聞いてくれる人はそんなこと知りません。でも、自身の課題に固執せず、聞いてくれる人のために内容や構成を工夫し、練習してから臨めば、楽しんで聞いてもらえるはずです！